

千に届く贈り物よりも、きみと

征人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

寒さが続く真冬の気温にあてられ、心の様相は少しずつ感傷的に変わっていく。

物憂げな景色に染まるように、彼の感情もまた深い影を落としていた。

けれども。灰色の空もいつかは終わりを迎えて、また明るい空の色を描いていくだろう。

大切な彼女が教えてくれた「優しさ」を胸に、彼はこれからも歩み続ける。

厳冬が続くある日のこと。サンタクローズに扮した彼女は微笑みながら、今ここにある幸せを噛みしめるのだった。

続編「陽だまり色センチメンタル」のその後のお話です。

千に届く贈り物よりも、きみと

目次

千に届く贈り物よりも、きみと

換気のためにと窓を開ければ、鼻の奥につんとした刺激が走った。しかめっ面に追い打ちをかけるように頬を叩いてきた風は肌を突き刺すような冷気を纏っていて、それは何でもない冬の訪れを感じさせている。

秋色の残滓を含んだ空もいずれは灰色に染まっていくだろう。春、夏、秋と来て冬が来ないはずもなく、感傷的な空気を孕みながらも、刻々と巡る世界は四季の遷移を物憂げに語っていた。

落葉散る秋から小雪の舞う冬へ。落ちていく木の葉は色褪せながら積雪に埋もれて朽ちていき、激情のように燃え滾っていた夏とは相反して、生命の終点おわりを描いたような儂い色彩が空を満たしていく。

底冷えの続く厳冬に晒されつつも、彼らの搭乗する中型騎空艇「グランサイファア」はとある街に停泊していた。時刻は夕餉ゆうげを迎える頃だろうか。忙しくなく厨房に行ったり来たりを繰り返している団員たちを眺めながらも、温かな料理に舌鼓を打つ穏健な時間がそこに流れている。

そんな中、場所は変わって遊戯室。団員といえども成人に達していない者も数多く加入するこの騎空団では、親睦を深める憩いの場所が存在する。流行りの遊具に興じて各々が戦いの日々から少しでも安らぎを得られるようにと、グランとジータが考案した部屋だ。実際のところ団員たちには好評だったらしく、連日その場所は食堂と同じような賑わいを見せていた。

わいわいと団員たちの喜色に満ちた声が飛び交う中で、部屋の隅には落ち着いたスペースも提供されている。そこには遊戯から離れた者たちが足を伸ばして立体型暖房装置——いわゆる「こたつ」に入ってくつろいでいた。時期も時期なのでシエロカルテから紹介してもらい格安で取り寄せたものだったが、そのこたつは思いのほか人気が高く、自室にも備えてほしいと要望を出す団員までいた。

もちろんそれはグランサイファアの設備費用が跳ね上がるので却下されているが、その件もあって遊戯室にはこたつ目当てで足を運ぶ

者も少なくはない。実際、そこに入っているものたちは遊ぶわけでもなく、こたつから発せられる程よい熱を受けて頬を綻ばせていた。

その最たる者が彼女——センだろうか。

ぬくぬくと伝わる暖気を浴び、ついでに備えられた毛布にくるまりながら口角を上げている。

「はふー……あつたかいです……♪」

「猫はこたつで丸くなる、っていうけど。本当にセンちゃんはこたつが好きだね」

向かいに座る副団長ジータがこたつの上にあるみかんを剥きながらもほほ笑む。その隣には元黒竜騎士団副団長ことパーシヴァルの姿があった。

「理想の国を創る」という目的を掲げ、過密なハードスケジュールで世界を巡るパーシヴァルだったが、今回は久しぶりに余暇が取れたのか、炎のように燃え盛る緋色の髪を流すように下ろして、プライベートなスタイルでグランサイファーに滞在していた。そんな彼はこたつに突っ伏してゴロゴロ猫のように鳴くセンに少ししかめ面をしつつ、こう言ってきた。

「全く。壁を伝って走るお前とは到底思えん姿だな……ほら、姿勢を正せ。変な体勢で居続けたら身体に悪いぞ。戦闘に支障が出る」

「まあまあパーシヴァル。許してあげなよ。センちゃんさつきまで街を走り回って、みんなにプレゼントを配りまわってたんだしさ。……というわけで、そんなセンちゃんにご褒美だよ。ほら、あーん」

さつきまで剥いていたみかんをセンの口に運んでくるジータ。そんな彼女にセンは「わあい」と子供ののように喜んでみかんを口に含んだ。そんな様子を眺めつつ、幸せそうに頬を膨らませるセンにパーシヴァルは肺腑からため息を一つ。

そして何故か、ジータと同じように手前にあつたみかんを剥いていく。

「その配りまわっていた奴が、こうも気の抜けたままでいるとな……休暇中とはいえど、いつ何が起こるか分からん。警戒するにこしたことはない。……セン、口を開けろ」

そう言つてパーシヴァルがセンの口元にみかんを運んでくる。

「はあい」とセンは素直にそれを口に含んだ。

「まあ、確かにそれは言えるかもね。でも大丈夫でしょ。その為にグランたちが哨戒に就いてくれてるんだしき。はい、センちゃん、あーん」

「んむっ……？　は、はい。あーん」

「だとしてもな……団長にも限度はある。グランはここ最近働きづめだと聞くが、休息が必要なのは団長ではないのか？　……セン」

「んむむむ……あ、あーん」

「ああ、その点なら大丈夫。今日からグランもしばらくお休みがあるみたいだし。流石にグランばかりに頑張ってもらうのは悪いよ。その為の副団長なんだしき……センちゃん、はい」

「んむむむむむ……！」

「それなら問題ないが。あいつも頑張りすぎる節が見える。たまの休みくらい、何処かでゆっくりしてはいいと思うのだがな。……セン」

「そうだね。どこかでゆっくりと——いちご狩りでも行つてみる？」

「はい、センちゃ——」

「んむむむむむむ……！　も、もうふあいにやらいれす……！！」

「ん？」

「あつ」

悲鳴に近いセンの声を耳にして、二人が何事かと彼女の方へ視線を向ける。

そこにはまるでリスのように口を膨らませたセンの姿があった。嘔下することなく口腔に蓄積されたみかんを頬袋いっぱいにためたセンは涙目でジータとパーシヴァルに訴えている。

雑談に意識を集中させていたためか、まったくもって彼女の様子を見ていなかった。その点については僅かな罪悪感に駆られてはいるものの——小動物のように慌てるセンを眺めているうちに、悲しいこと？に謝罪よりも愛しさがこみあげてくるのをジータは感じていた。

パーシヴァルに至っては「すまん。見ていなかった」とさも悪気なく簡素に謝っているあたり、どこか面白がっているような節が見て取

れる。

そうしてようやく溜め込んでいたみかんを飲み込むと、センは「わ、わたしはリスさんじゃありませんよう！」と抗議の声を上げた。それを聞いて「ごめんごめん」と謝りつつ、ジータはくすくすと小さく笑った。それでもなおみかんを口に入れようとすればセンもさすがにむくれた様子で「も、もうみかんはいりません！」とふいつと視線を離してそっぽを向く。

器用に動いていたエルーンの耳が彼女の今の感情を表すように――怒髪天を突くにしては聊か可愛らしい態度ではあるが――大きくぴんと立った。

しばらく不貞腐れたままでいる彼女にジータは面白がっていたが「とある事実」に気付いて、センに先程とは打って変わって、真面目な声色でこう尋ねる。

「あれ、そういえばセンちゃん。ここでのんびりしてて大丈夫なの？
そろそろグランが戻ってくる時間だと思うけれど」

こうして穏やかな時間を過ごしている者もいれば、グランのように寒冷の下で艇の警邏にあたる者たちもいる。交代で行われているのでそろそろグランも哨戒を終えて、鼻頭を赤くさせながら騎空艇にもどってくる時刻だ。団長が直々にそういった任務に就くというのはなかなか異例ではあるが、この騎空団はある意味で「普通」の騎空団ではない。

ここはエルステ帝国という強大な力を持つ国と戦闘を繰り広げた酔狂かつ強靱な者たちが集う艇であり、そんなよそらのマフィアや魔物相手では到底太刀打ちできないほどの力がある。それぞれは星の島「イスタルシア」に向かうというグランの目標と人柄に惹かれ、こうして一つに集っている。

多種多様な想いを載せたここは、ある種の結束に満ちた信頼で構成されているが故に、団長であろうと先陣を切って出陣する。その行動は背を任せられる者たちがいるからこそできる芸当であり、それはここで流れる「家族」という空気がそのような異質を常識へと変えていた。

さて、そんなグランが戻ってくるということを耳にして、ふてていたはずのセンがぴくりと反応した。彼女にとってグランは特別な存在であり、それは周囲も既に認知をしている事実である。それは命のリンクを繋いでいるルリアとはまた違った——いうならば心のリンクとでも言えようか。

木漏れ日が包むように大地へ差し込んでいた、麗かなあの日。いつも通りに過ぎていくはずだった日常に一時の亀裂が走り、それはセンやグランの心に深い影を落としそうになりかけていた、転機とも呼べる日だった。満天の星空の下で、二人は互いに抱いていた想いを伝えあい、そして親密な関係へと至った。そんな人がもうすぐ戻ってくる事実を告げられては、センも不貞腐れている場合ではないだろう。現に、クリスマスプレゼントと称した贈り物をその白い袋に潜ませながら、彼の帰りを今か今かと待ち望んでいたのだから。

「センちゃん。街の子たちにもプレゼントをいっぱい配ってたよね。グランには何をあげるつもりなの？」

「えつとですねー……えへへ、最近、寒いじゃないですか。グランさんも何も備えずに寒い中を歩くのは嫌だと思っんです。それでコルワさんをお願いして、まふらーの編み方を教えてもらっんです。それがここに——」

あるんです。と満面の笑みで白い袋の中に手を突っ込んだのだが。ガサゴソと手探るその中に、マフラーなる編み物の存在は、なぜか見当たらなかった。「？」と首を傾げて、袋の中を覗き込む。けれども、そこにあるのは薄い生地で作られた白の布製の袋だけ。プレゼントを配り、空っぽと化した布切れだけが物言わずそこにあるだけだった。次第に彼女の顔に焦燥感が走る。裏返してもひっくり返してもそれは見つからず、暖気で温まっていたはずの彼女の顔色が、さあつと青く染まった。

「あ、あれ？ おかしいです。あ、ありません。グランさんに用意したまふらーが。お、おかしいです。ありません……ど、どこにもありませんー！」

しまいにはズボー！っと猫のように白い袋の中へ頭を突っ込むセ

ン。その様子を見て慌ててジータが白い袋に突っ込んだセンをずらずと引つ張り出す。

「ちよ、ちよつとセンちゃん！ そんなことしてもないものはないよ！ ……どこかに落としちゃったの？ とうか、なんで配る用のプレゼント袋にそんな大切な物を入れたの」

「うう……一応わたし、さたんくろーすさんですし……最後のぷれぜんとはグランさんって決めてましたので……落としたにしても、そんな記憶は全く——あつ」

そしてセンは思い出す。街並みが黄金色の夕暮れに染まりつつあつた夕刻。人足も疎らになり、本格的な寒さが世界を支配しようとしていたそんな中、壁をつたって街中を颯爽と走る途中で、センは寒そうに身を震わせる子供を見つけた。

聞けばその子供は戦争で親を亡くし、教会に身を寄せて少ない身銭で生計を送っているとのこと。サンタクロースからの贈り物も知らなければ、バースデープレゼントを受け取ったこともない。人々の常識から逸脱したその子に対して、今だけ幻想的な存在であるセンはにこやかな笑みで渡していたのだ。グランに渡すはずであつたマフラーを。

いつまでもお礼を言いながらセンの姿を見送る子供には、まるでセンが本当のサンタクロースに見えたことだろう。

すつぽりと抜け落ちていた記憶を思い起こして、センは頭を抱えて「にゃあ〜」と唸った。

それを聞いて、ジータとパーシヴァルも同じように首を捻って唸る。

「うーん。センちゃんの善行はまあ良しとして、どうしようかな。プレゼント」

「即席で考えるところでも、あのグランだ。無欲な奴への贈り物ほど難しいものはない」

「ううううう〜！ ど、どうしましょうどうしましょう〜！」

やってしまったと後悔しても先立たず。あるものがなければ渡すことはできない。悲観するセンを尻目に、ジータは少しの間思慮に耽

る。グランが喜びそうなもの、それは彼の幼馴染たるジータが一番知っているのではないか。そんな期待を胸に潜めて視線を送っていた炎帝だったが——名案、というか妙案を思いついたようにジータはにやりと口角を上げた。

その横顔を眺めてパーシヴァルが嫌そうな顔をする。「良い案かと思えば……ろくでもないことを思いついたな、この副団長は」と眉根をひそめて無言の抗議を送っていたが、そんな彼の視線を無視するかのように、彼女はどん、と自分の胸元を叩き、センに向けて自信満々に言い放った。

「ふふふ、センちゃん。今わたしにいい案が浮かび上がったよ。

どう、ちよつと恥ずかしいかもだけど、実践してみる？」

その言葉を聞いて、凹んでいたセンがバツ！と跳ねるように起き上がった。

そして彼女の返事を待たずにセンは物凄い勢いで首肯を返す。

「や、やります!! こうなってしまったのもわたしが原因です! ——ちよ、ちよつと恥ずかしくても、耐えてみせます!」

そう食い気味に力強く応えるセンにジータは不敵な笑みを返した。ある種、そこまでセンに想われているグランにほんのちよつとの嫉妬を覚える彼女だが、それはそれ、これはこれ。若干の遊び心を含ませながらも顔の綻びを隠そうとしないジータに、パーシヴァルだけが言いようのない不安を覚えるのだった。

◇

「……ふう、今日は本当に冷えるな」

厚手のコートについた雪を手で払いのけながら、グランが連日続く寒さにそうぼやく。哨戒の任務を終えた彼は事務的に引き継ぎを交代の団員と行い、グランサイファアの甲板部で身なりを整えていた。本来ならばこういった見張り任務も適材の団員（特にグランを慕っているジャミル等）に任せておけばよいのだが、それをしないのがこの団の規律であり平等を重んじる彼の考えでもある。

とはいえ流石に危険な任に不適合な人員を配置するような無謀は行わず、ある程度の団員の要望を汲んだ上で規律は取り決められてい

た。不平不満が出ないように考えるのはこうも難しいことなのか、と最初の頃は愚痴を漏らす彼だったが、最近はそんな影も見られず板についた様子で団長としての風格を露にしていた。

髪や服についた雪を払い、装備一式を外して武器倉庫に収納し、属性力が込められた嚴重な鍵を用いて施錠する。部屋に備えている護身用の武器以外はこうやって管理するようにジータと取り決めていた。何せジョブによって武器を変更しなければいけないので、習得するジョブによってはどうしても武器の種類が増え、それに伴い管理体制がおざなりになってくる。

多様が増え続ける武器を各々で煩雑に管理するよりかは、とジータから提案されたそれにはグランも概ね同意だった。中には全空に名立たる貴重な武器もあり、賊からの窃盗を防ぐための巡回警備はそれなりに重要視される。

そんな哨戒を終えたグランだったが、本日はさしたる異常も見られず平和そのものであり、雪の到来に浮足立ってはしやぎまわる子供たちを微笑ましげに遠くから見つめるだけの時間に終わった。

それでも外気はグランの身体を芯から冷え切らせていて、早く温まろうと思いつつも駆け足で自室へと戻る。食堂で一服してから戻ることも考えたが、今は風邪をひく前に身体を温めるのが先決、といわんばかりに自室に備えられたシャワー室を目指していた。自室の前に立ち、鍵を取り出す——が、なぜか鍵は開いている。

「?」と疑問を浮かばせながらグランは恐る恐る部屋のドアノブに手を掛け、ゆつくりと開けていく。合鍵を渡している人物は二人しかないはずなので、恐らくそのどちらかが部屋にいるんだろうけど——と疑念を抱きつつ、部屋の中に入れば。

そこにはやはりというかなんというか。その二人のうちの一人である少女——センの姿がそこにあつた。今は彼のベッドの上に腰をかけ、ぱたぱたと待ち遠しそうに足を動かしている。そんな彼女がグランの存在に気付いたのは数秒もせずだった。ぱっと目が合い、グランは愁眉を開いてセンに笑顔を向ける。向け——ようとしたのだが。

「ただいま、セン。どうしたんだ、僕の部屋に入ってきた——」

言葉を続けようとしたグランが笑顔のまま硬直する。今日は彼女も朝から街に配るクリスマスプレゼントの準備に奔走し、ホーリーナイト・スペシャルマッチの時に見せたあのサンタ服でプレゼントを配りまわっていた。それを終えて一足先にグランサイファーに戻った彼女がこうして自室で出迎えてくれていたのだが——どうにもその様子が、いや、格好がおかしかった。

グランが想像していたその恰好とは違い、彼女は、なんとというか——クマだった。

否、誤解なき表現で例えると、それはクマのコスチュームとでも言うのだろうか。

娯楽地にあるようなずんぐりむっくりのぬいぐるみではなく、彼女のそれは等身に合わせたパーカースタイルで、普段とは違う少しお洒落に気を遣った格好だ。いつも装着していた大爪はモコモコとした熊手が変わっており、自分のエルーン耳はパーカーに隠れ、その代わりにふわふわと丸いクマの耳が揺れていた。

もふもふした山吹色の全身は自己を主張するようにきらきらと照明に当たって光を見せ、セクシーというよりは小熊のような可愛らしさを表現している。そんな彼女は部屋に入ってきたグランを見るなり、両手をばつ！と構えて威嚇してきた。

「あ、グランさん、おかえりなさい——じゃなかった。

……え、えと、えと……が、がおー！ わ、わたしはくまさんですよー！ こ、怖いんですよー！ 強いんですよー！」

さながらそれは、野生のクマが行う威嚇の真似だろうか。「がおー！」と、まるで迫力のない構えで彼の前に立ちふさがるが……そんな様子を見ながらグランは、目を大きくさせるだけで全く微動だにしていなかった。

一切の反応がないノーリアクションっぷりに、勢いづいていたセンが一気に気圧され始める。

一言でも言葉が出るのならともかく、彼はさっきから全くの無言無表情でじっとセンの姿を見つめているだけだ。驚きのあまり絶句しているグランの前に、センは羞恥のあまり顔を林檎色に染めながらも

先程の強気な様子を一転させ、今度は弱弱しく、おずおず尋ねるよう
に言ってくる。

「……た、食べちゃいい、ますよー……?」

しかし。それでもグランは目をぱちぱち瞬かせるだけで身じろぎ
一つしていない。そんな無反応の彼の様子にとうとうセンも根負け
したか。「あうう……」と掲げていた両手をすつと下ろし、とぼとぼと
グランに歩み寄ってくる。

そうして何を思ったか、センは被っていたフードを外して、その場
で佇んだままのグランにぎゅつと抱き着いた。隠れていたエルーン
の耳をひよっこり出して、困ったようにそれを折りながらもセンは
「……にやあ」

と、こちらに覗き込んでくる瞳にうつすらと涙を溜めたまま、上目
遣いでそう鳴いた。

いや、正確には泣きついた。先程までの威勢はどこにいったのか。
クマが猫になった瞬間である。

彼女からほのかに伝わる体温を感じて、ようやくグランも正気に
戻ったのか、遠い忘却の彼方に飛び去った意識を取り戻して——同じ
くセンをぎゅつと抱きしめ返す。

「ううう……グランさん酷いです……冷たいです……身体もひんやり
です……」

「……と、取り敢えず訳は後で聞くから。今はシャワー浴びてもいい
かな? このままだとセンも風邪をひいちゃうしさ」

そうグランは自分から離れてほしいと告げる。それを承諾したセ
ンはそつと彼から離れると「にゃ……」と両手で顔を隠しながら、グ
ランのベッドに寝転んでしくしくと悲しみに明け暮れ始めた。そん
な彼女に何と言葉をかけたらいいいのか分からぬまま——グランは部
屋に備えられていたシャワー室に入っていた。

◇

シャワー室から出た後も、センはグランの布団に寝転がったままで
いた。それでも格好は元に戻したのか、先程のクマのパーカーではな

くクリスマス仕様のサンタ服を着ていた。いつもの服は着ないんだな、と怪訝に思いながらも髪をタオルで拭いていくグラン。未だに落ち込んでいるセンの隣にすつと座り、こう言う。

「……それで、どうしてあんな恰好してたんだ？ サプライズにしてはその、何ていうか……確かにびっくりはしたけれども」

しどろもどろに言葉を交わす彼に対して、センがすくつと起き上がる。「ええつと……」と頬を指でぽりぽりと搔きながらもその視線はあさつての方向に向いている。何か言いにくいことなのかな、と怪訝な様子でセンを見るグランだったが、観念したように彼女はぽつぽつ語り始めた。

「えつと……実は、グランさんにもぶれぜんとを贈ろうと思ひまして。でも、グランさんのほしいもの、急には何も分からなくて……だから、その、ジータさんに聞いたら『これを着て団長を驚かしてみて』って言われて……あ、あうう……やってみたはいいものの、やっぱりこれ、恥ずかしいですよ……！」

そう言つてセンは恥ずかしそうに自分の顔を手で隠した。

最初に用意していたものは子供にあげちゃったので、渡すものがない。

それならせめてハロウインのように面白おかしく驚かしてあげよう、というのがジータの提案だった。

それを聞いてグランは大きく嘖き出した。自分の幼馴染は相変わらず奇妙なことをやろうとする。

けれど——確かに驚きはしたけれども、可愛らしいサプライズだ。身体を張つたセンの一芸に面白おかしく笑っていたら、顔を隠していたセンから「も、もう笑わないでくださいよお！」と抗議の声が上がった。

しばらくの間、からかうようなグランの声とにやあにやあ恥ずかしがるセンの声飛び交っていたのだが——そんな折で、彼女がふつと恥ずかしがるのを止めて、真面目な声色でこう尋ねてくる。

「……あの、グランさん。グランさんは、本当にこれで、良かったんですか？」

グランさんに聞くのもなんですが、何かほしいものは、ありませんか……?」

身体を起き上がらせたセンが、隣にいたグランにずいっと迫ってくる。その赤の瞳は未だに不安に揺れていて、本当にこれで大丈夫なのか。本当はもつと別なものがいんじゃないか。そう視線で問いかけている。そんなセンの様子にグランは一瞬だけ思考を逡巡させると

「うーん? そうだなあ……」

少しだけ考えたような素振りを見せて、ふっと笑顔を見せる。「?」ときよとんとした顔でグランの微笑みを眺めていたセンだったが――

「ひゃっ!」

「いや、何もいらないよ。センが居れば、それでいい」

無垢な瞳をきらきらと瞬かせていた彼女を、グランはぎゅっと抱きしめた。唐突に抱擁が交わされたのでセンはあたふたと動揺を隠せずにいたが、彼越しに伝わる心音とぽかぽかした温かさがとても心地よくて、センもそれを拒否することなくすんなりと受け入れた。シャワーを浴びた後の爽やかな石鹸の匂いが彼女の鼻腔をくすぐる。彼の肩に顎を乗せて頬ずりをする、グランもそれに応えるように自分の頬をこすりつけてきた。それが嬉しくて、センはえへへと幸せそうに笑った。

「……じゃあ、グランさんは、わたしがぶれぜんとでいいんですか?」

「ああ。十分すぎるくらいのプレゼントだよ。ありがとね」

そう伝え、すつと彼女から身体を離す。触れ合っていた心音が届かなくなっただけに少しの寂しさを覚えたが、それも一時のこと。よいしょ、と体勢を変えたグランは彼女の後ろに移動すると、そのまま包み込むように後ろからぎゅっと抱きしめた。聞こえなくなった鼓動が背中越しに再び届き始めて、センの心に安堵が満ちていく。グランの大きな腕に包まれながら、嫺やかな笑みを浮かべてセンが言葉を綴る。

「……ちよつと考えてみたら、グランさんって結構よくばりさんです

ね。

だって、さたんくろーすさんを独占しちゃうんですよ。それ、ちよつとずるいです。

そうしたらみなさんにぶれぜんと、渡せなくなっちゃいます」

「そう？ ……ああ、確かにそうだな。センを独り占めしちゃうもんな」

それでも全く嫌そうな素振りは見せず、センはくすくすと控えめな笑いを続ける。サンタ帽子から覗いている耳はちよつとだけ恥ずかしいのか先端が赤くなっていたけれど、これでも耐性はついた方だ。

以前のセンなら耳全体が真っ赤になっていたこともあったので、色恋に対しての成長がはつきりと分かる。恥ずかしさで逃げ回ることなく、借りてきた猫のように大人しく抱かれる彼女は確かな親愛をグランに寄せていて、そう思ったからこそ——彼は唐突に、こんなことを言い始めた。

「そうだ。センは、僕のこと好き？」

「ふにやつ!?!」

突如飛んできたストレートな質問に、センの身体がびくりと跳ね上がる。突然何を、と慌ててグランの方に振り返るも、当の本人はニコニコ笑いながら彼女の言葉を待っている。そんなこと言わなくても、と目で訴える彼女の想いは無視され、急かすように首元を撫でられて気持ちいい反面、失いつつあった恥ずかしさが再び胸の中にこみ上げてくる。

そしてセンは小さく縮こまって俯くと、ぽつりと、独り言のようこう呟いた。

「……す、すき、です……」

「……そっか。それならよかった」

ありがとう。と小さくお礼を伝えて頭を撫でるグラン。それに対してセンが感情を爆発させるかのよう、涙目になってグランに訴えてきた。せつかく落ちて着いてきたのに、と抗議を仄めかしながら。

「……あううううううう！ 改めて言葉にすると恥ずかしいです！ ぐ、グランさん、どうしてそんなこといままさら聞くんですかあゝ

！」

いざ言葉にすればあつという間に胸の奥から言いようなない感情がこみ上げてきて。

もちろんそれは変な感情ではない、誰しもが抱く当たり前の想いではあるのだけれど。

あの時に確かにお互いは想いを伝えあつた。好き合っているのは間違いない。

それなのに、何で今更そんなことを訊いてくるんだろう。

疑問と羞恥を胸に抱いて訴えかけても、きつとグランは笑つてお茶を濁すのだろう——と、その時のセンは思っていたのだが

「……そうだね。どうしてだろうか。時々、不安になるんだ」

耳に届く予想外の返事は、いつもの彼とは違う不安げな声色に満ちていた。

まるで何かを恐れているような、自分を面白おかしくからかってくるグランとは思えないような声が、センの抱いていた恥ずかしさを一時だけ忘れさせた。グランの抱きしめる力が、ほんの少しだけ強くなる。そこにあるセンの身体をもっと強く感じようと、もっと強く触れようとする想いが伝わってきた。

囁く声が、影を落としていた彼の感情を露にさせていく。

「言葉にしなくても分かっていることなのに、センに触れて、センに想いを告げてもらつて、初めて安心が出来る。我ながら面倒くさい奴だとは思ってるのにね……怖いんだ。この幸せが、この温もりが、いつか音を立って崩れていくような……そんな気がして」

「……グラン、さん？」

「僕たちは平和な世界で暮らしているわけじゃなくて、途方もないくらいに戦いの、冒険の最中でこうやって毎日を過ごしてる。こうやってセンと身体を触れ合つて、お互いの気持ちを伝えあえてても、いつかどこかで切り裂かれて終わるかもしれない。

……それが怖いんだよ、凄く。きみを失いたくないし、死にたくない。そんな臆病な感情が、時折襲い掛かってくるんだ。あの時——ルリアと命のリンクを繋いだ時の夢を何度も見て、何度もうなされて

……そんな悪夢を、現実の物にしたくないんだ」

事実、何度も危険な目にはあった。命を失うまでの激戦を潜り抜けたことだってあった。

戦いの果てに見た景色が希望でなく絶望に染まっていたこともあった。幸せになるはずだった人たちが物言わぬ骸と化し、これから歩むであろう未来が潰えてしまったのを——グランは何度も見てきた。

そんな事実直面するたびにグランの心情は黒い色を落としていき、今噛みしめている幸せも、いつかは急に終わってしまうんじゃないのかと——そんなどうしようもない事実には怯えてしまっていた。

かつてはグランも、エルステ帝国の手によって一度は死に、そしてルリアから命を分けてもらって、こうして生き続けることができていた。もし、グランとルリアを繋ぐリンクが何の前触れもなく切れてしまったら、繋がっていた糸が、突拍子もなく切れてしまったら——この幸せもうたかたのようにあっけなく終わってしまうだろう。

大丈夫、と根拠のない虚勢を張ることはできても。

心の奥底に抱く恐怖は、いつまでもしがみついて離れない。

落ち着いているように見えてその実、グランもまだまだ少年であり、誰かを頼らねば無茶をしてしまうような若気がある。感受性豊かな年頃である故に、一度体験した「死」の恐怖は、ほかの誰よりも強く心に根付いてしまっている。

大人ぶっているわけでもない優しい少年が求めているのは、まだ見ぬ世界への挑戦と——

「千に届く贈り物よりも、きみと生きていたい。

僕の中には、これしかないんだ。それくらい……センのことが好きなんだ」

どこにでもある、ありふれた幸せだけ。

大好きな人と道を分かたれることなく、共に歩んでいきたい。

ただそれだけの、シンプルな想いだけだった。

抱きしめていた腕は少しだけ震えていて、それが寒さのせいではないとセンは知る。

失う怖さを知っているから、そして目の前で大切な人たちが消えていく怖さを——星晶獣アーカーシヤを通じて知ってしまったから。途方もなく深い心の闇が、人知れずグランの心を浸していた。

そんな弱気に転じてしまっているグラんに——抱きしめていた彼の腕をきゅ、つと握って、センは大きく息をついた。落胆ではないその呼吸は、今から語る言葉の整理をつけるためのものだ。

やがて彼女はグランを勇気づけるわけでもなく、ただ、これだけぽつりと言った。

「グランさんって、思ったより寂しがり屋さんなんですわね」

行儀正しく背筋を伸ばしていた彼女が、彼に身体を預けてくる。ぽふ、とグランの首筋にセンのさらさらした髪が触れ、そして——優しい彼女の言葉が、グランの心に触れた。

「でも、よかったです。グランさんのそんな一面を知ることができて……しってますか？ グランさん、ほかの団員さんの中では『優しくて強くて真面目な団長』さんで広まっているんですよ。もちろんそれも事実ですけど……それだとグランさん、疲れちゃいますよね。いつも気を張って、本当は頼りたいのに、心の中を見せないようにして、ずっと苦しいのに笑顔で頑張り続けて……」

それは団長であるが故に。誰しもから頼られる大きな存在でありたいとするグランの見栄でもあったが……そんな子供っぽい背伸びは既に彼女にはお見通しのようで。心に引つかかっていた蟠りを和らげてあげるようにセンは無邪気に笑った。そして、それに含めるように自分の想いをぼつぼつと語る。

「だから、そんなグランさんが、わたしに本音をぶつけてくれたこと……すごく、すごく、嬉しいんです。わたしでも、あなたの役に立ってるんだなって、心の内を明かせられる、そんな存在になってたんだな、って……」

恋人になって。大切な人になって。

変わらない日常が続いていた。時折こうやって二人で会って他愛

もない話をしたり、子供のようにつれ合ったりすることはあつたけれど。悩んでいること、辛いことを交わして心の支えとなるような場面はなかった。前とさして変化のない、ありふれた日々が雲のように流れていくだけだった。

だからグランがあまりのままの本音を語つたのを知つて、センは心の底から嬉しかった。

グランの力になってあげたいと思つていた心優しい少女は、ようやく隣に居て彼の抱いていた想いを知つた。

人は誰しもが心に深い影を覆つていて。それは団長であるグランも例外ではない。

昼行燈で穏やかな性格の彼はいつも頼られる側だったから、本音を吐き出したい気持ちをぎゅっと抑え付けて、継りたい気持ちを押し殺していた。

きつとつらかつたんだろう。苦しかつたんだろう。

心を、遠慮という形で犠牲にしてきたんだろう。

だから——そんな彼を支えてあげることができるならば。

一生懸命に頑張るグランの背中を支えてあげることができれば。

そんな不安も薄れていくはずだ。前を向いて、しっかりと地面を踏んで歩いていけるはずだ。

「だから、何かあつたら、わたしに言ってください。ルリアちゃんと命のリンクが繋がっているように、グランさんのつらそうな顔を見ると、わたしもつらくなっちゃうんです。わたしは、わたし、は——」

そう告げ、センは少しでもだけ身体を傾けて——グランの唇に自分のそれを重ねた。

柔らかな唇が、グランの心に安らぎを与えていく。求めるわけでもないそれは弱気に移ろつていた彼の心音を落ち着かせて、正常に変えていく。少しの間だけ触れ合っていた唇をそっと離して、センは小さくほほ笑んだ。慈愛に満ちて落ち着いた声音が、グランの耳朵を優しく叩いていく。

「わたしは、あなたの恋人です。何も言わずにいなくなつたりしませ

んし、死んじやったりしません。——約束してください。グランさんも、無理しないで、そして——絶対に、死なないでください」
彼女の健気な言葉はいつもまつすぐで、その度にグランを鼓舞して勇気づける。

心の情景は悪意のない憧憬で暗く淀んだ世界を描いていたけれど、それもじきに、彼本来の明るさを取り戻していくだろう。センチメンタルに浸っていた冬色の物悲しさは、穏やかな日差しに似た彼女の素直な想いによって変わっていく。

腕の震えは、いつの間にか止まっていた。

そして、気が付けばグランは——力強い言葉で、センに答えを返していた。

「ああ、約束するよ。絶対に無理しないことと、死なないこと」

まだ行ったことのない地へ、まだ見たことのない場所へ。

そして父の待つイスタルシアに着くまでは——何が何でも、ここで終わらせるわけにはいかない。

旅の終わりを迎えるには、まだ早すぎる。いくつもの困難が待ち受けているなら、仲間と——そしてセンと共に立ち向かえばいい。グランは一人ではない。ここは騎空団であり、家族のようなものなのだから。

「……不思議だなあ。センと一緒にいたら、なんでもできそうな気がするんだ」

「ふふっ。それは、いいことだと思いますよ。わたしがグランさんのやる気になってるなら、嬉しいですよ」

そう言葉を交わして、二人は少しの間無邪気に笑いあう。

年端もいかない少年少女たちが置かれている現実には、時に冷たく非情に押し掛かってくるけれど。

それでも、そんな現実には立ち向かう力が確かにある。一人じゃ難しいことかもしれないけれど、きつと二人なら、そして背中を支えてくれる仲間たちがいるのなら——どんな壁だって乗り越えられるのだと、改めてグランは感慨深く知ることができた。

先程まで沈んでいた気持ちが嘘のように、しばらくセンとじやれつ

いていたグランだったけれど

「そうだ。貰ってばかりじゃ悪いし、僕からも何か贈るよ。セン、何か欲しいものはある?」

そう、ふっと思いついたように告げてきた。欲しいもの、と言われ少しいの間答えを窮したセンだったが——ある結論に辿り着いて、彼女はふるふると首を振った。

「いいえ。大丈夫です。さたんくろーすさんは贈り物をしますが、貰うことはしません。だからわたしも、ほしいものはありません。それに……」

抱きしめていたグランの腕を解いて、センがひよい、とベッドから降りる。そうしてうーんと大きく伸びをすると、くるりと振り返って満面の笑みでグランに抱き着いた。「わわっ!」と大きく仰け反った彼にセンはどこ吹く風のように、あおむけに倒れたグランにしっかりとしがみ付き——その胸に顔を埋め、彼から伝わってくる確かな命の鼓動ありかを聞きながら

「わたしの欲しかったものは、ここにありませんから」

幸せそうに、そう呟くのであった。

静寂な空気の中、グランサイファーが純白の色彩に染まる。

雪化粧に身を包んだその艇の中で、ありふれた言葉たちが空に溶けて昇っていく。

彼らの結末は未来を見通す魔女にしか知り得ないものの。

それでも今は静かに、深々と降り続く淡雪だけが——彼らを静かに見守っていた。

千に届く贈り物よりも、きみと F i n